

6. 古墳を地域資源化する（4） —湯舟坂2号墳プロジェクトの2023年—

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学文学部考古学研究室では2020年より京丹後市教育委員会・京丹後市久美浜町須田区などと共同で、湯舟坂2号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を明らかにするとともに、その成果を地域資源として活用するための様々な取り組みをおこなっている（京都府立大学文学部考古学研究室2023aなど）。今年度も令和5年度京都府立大学ACTR「地域・学校・博物館との連携にもとづく文化遺産の次世代に向けた活用研究」（研究代表：菱田哲郎）の一環で、地元久美浜において第3回目となる京都府立大学ACTR成果報告会を開催し、湯舟坂2号墳に先行する首長墳である須田平野古墳の発掘調査を実施するなど、様々な活動を進めてきた。以下、本年の取り組みを中心に紹介する。（諫早直人）

2. 「つなプロ」を通じた高龍小学校との交流

本節では、前稿（京都府立大学文学部考古学研究室2023a）で紹介できていなかった、昨年度実施の「つなプロ」の取り組みについて報告する。

京都府ミュージアムフォーラムが推進する「次世代と地域文化をつなぐミュージアムプロジェクト」（通称：つなプロ）は、次世代である子どもたちがふるさとの宝物を再発見、発信することで地域文化と次世代を「つなぐ」ことを目指すプロジェクトである。昨年度の実施校に、湯舟坂2号墳を校区に含む京丹後市立高龍小学校が選ばれたのをきっかけに、当研究室も学生を中心に参加し、高龍小学校の5年生29名との交流をおこなった。

2022年9月22日、古墳や文化遺産に対する小学生の理解を深めるため、出張授業をおこ



写真1 高龍小学校での出張授業の様子



写真2 古墳ツアーの様子



写真3 つなプロ発表会の様子



図1 パンフレット『高龍 AtoZ』

なった(写真1)。当研究室の学生が教室におもむき、古墳に関する基礎知識や湯舟坂2号墳の概要などについて分かりやすく説明した。小学生の関心を引き起こすため、授業には寸劇やクイズを交え、休み時間には歓談やドッジボールをするなど、親しい関係を築くことができた。

この事前授業を踏まえて、9月26日に小学生を古墳に案内する「古墳ツアー」を実施した(写真2)。地元住民が整備管理している湯舟坂古代の丘公園を拠点に、湯舟坂2号墳・須田平野古墳について、学生が解説をしつつゲーム方式で回った。また当時、須田平野古墳の測量調査もおこなっており(京都府立大学文学部考古学研究室 2023b)、石室の実測調査の見学や、測量体験、表採した資料を触ってもらうなど、古墳を肌で感じることができる内容を企画した。

その後これらの活動で学んだことをまとめ、発表する機会が設けられた。小学生全員で準備と練習を重ねた発表は、高龍小学校の校内発表会(11月5日)や、京丹後市役所久美浜庁舎で開催されたつなプロ発表会(12月19日)で披露され、小学生による地域の魅力発信が実現した(写真3)。また小学生自らが「RyuTuber」となって古墳や地域の魅力を発信する動画も制作しており、これらの発表や動画は、現在YouTubeにアップされ、一連の活動をまとめた冊子『高龍 AtoZ』も刊行されている(図1)。これらはすべてつなプロの公式HPからアクセスすることが可能である(<https://museumforum.pref.kyoto.lg.jp/tsunapro/1497/>)。

つなプロの活動を通して、次世代をになう地元の小学生に、湯舟坂2号墳をはじめとする地域の魅力を伝えることができた。くわえて小学生自身がそれら魅力を発信する主体となった意義は大きく、古墳の「地域資源化」をともに進める強力な仲間ができたという点で、湯舟坂プロジェクトにとっても大きな前進といえるだろう。(吉永健人)

3. ACTR 成果報告会の開催

(1) 成果報告会の概要

今回は「地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ—湯舟坂2号墳の被葬者像を探る—」と題し、成果報告会を2023年7月1日に開催した(写真4)。

当日は、諫早直人による趣旨説明から始まり、本庄総子による古代史から見た「丹後王国論」の検討や、奥勇介氏(京丹後市教育委員会)による古墳から川上谷川流域の歴史的環境の検討についての報告がおこなわれた。また出土遺物については、稲本悠一氏(兵庫県まちづくり技術センター)が出土土器を中心とした湯舟坂2号墳の性格について考察され、守田悠(博士前期課程2年)が出土した鉄釘等について報告し、棺を中心に湯舟坂2号墳の被葬者像につ



写真4 成果報告会の様子



写真5 写真パネル展解説の様子

いて検討された。最後に菱田哲郎のもとで、今回のテーマである「湯舟坂2号墳の被葬者像を探る」に関するディスカッションがおこなわれた。また、質疑応答を通じて参加者も議論に参加し、被葬者像について議論を深め湯舟坂2号墳の価値を改めて確認することができた。

また、会場では恒例の栗山雅夫氏（奈良文化財研究所）撮影の高精細写真を用いたパネル展示もおこなった（写真5）。学生がパネル解説をおこない、湯舟坂2号墳の魅力を伝えるとともに学生自身もその学術的価値を再認識する良い機会となった。

（2）アンケートからみえる成果と課題

今回の成果報告会も来場者を対象にアンケートを実施した。その結果（有効回答62名）から湯舟坂プロジェクトの成果と今後の課題を整理してみたい。

参加者の傾向として、京丹後市在住者が75%を占め、前回と比較し、比率や人数が増加している。前回の課題であった須田区民の参加率に関しては、前回から3名増え6名になった。須田区民の参加者が増えたことは大きな成果であるが、より多くの須田区民の参加促進のためにもこれまで以上に地域との密接な交流を続け、積極的に情報発信をしていく必要を感じた。また、過去の説明会参加については、今回が初めての参加者が43%、前回から参加している人が25%、初回から参加し続けている人が19%と、一定数のリピーターの存在を確認できた。他方、参加者の年齢層についてみると、50代以上が約8割を占めており、若い世代の参加率の低さが指摘できる。新規参加者のうち70%がチラシによる情報入手であるという結果に鑑みても、幅広い年齢層の参加のためにはSNSによる広報を工夫し積極的に活用していく必要があるのだろう。自由記述欄に関しては、やはり湯舟坂2号墳の被葬者像についての関心が多く寄せられた。また、観光産業をベースとした地域振興を求める声も多く、徐々にではあるが湯舟坂2号墳が「地域資源」として認識され始めているようにも思われる。地域とともに生きる「地域資源」でありながら、「観光資源」としても活用し、次世代にしっかりと継承する道を探ることが、今後、ますます重要な課題となるだろう。

今回のアンケートでは、今後への期待も含めて当プロジェクトについて高い評価をいただいた。その一方で、前回から課題とされていた情報発信や、「地域資源」としての活用方法の検討といった課題も浮き彫りとなった。湯舟坂2号墳をはじめとする須田区の文化遺産を「地域資源」としてどのように次代につなげられるか、引き続き模索していきたい。（瀬川裕太郎）

4. 発掘調査期間における地域住民との交流

昨年度の須田平野古墳測量調査に引き続き、今年度は9月19日～10月2日に発掘調査を実施した。それにあわせておこなった地域との交流について紹介する。

(1) 須田区住民との交流

調査初日となる9月19日に、須田区の全60戸に対し、発掘調査のお知らせと須田区民向け説明会に関する案内チラシを配布した。約2週間の発掘期間中、須田区の公民館を宿舎として使用させて頂くということもあり、地元役員の方々に先導頂きながら、いくつかの班に分かれて須田区すべての家を訪問し、学生が発掘調査実施の旨を伝えた。これまでは須田区役員の方々を窓口として地域との交流をおこなっていたため、今回はそれ以外の多くの住民と初めて顔を合わせて話すことができる大変良い機会となった。また案内チラシにくわえ、ACTR成果報告会で配布したオリジナルグッズもあわせて贈呈し、当研究室の活動を簡単に紹介した。いずれの方々にも温かく受け入れて頂き、調査主体である大学や市と、古墳のそばで暮らす地域住民とのつながりを、より強く大きなものにできたららう。

9月24日には須田区民向けの説明会を実施した(写真6・7)。直接手渡しで案内チラシを配った効果もあり、計18名の須田区民に参加頂いた。午前は須田公民館でこれまでの「湯舟坂プロジェクト」の活動と、並行して進めていた発掘調査の概要について学生が紹介した。学生による説明の後には、参加した須田区民の方々からお話をうかがったり、歓談をしたりと、地域との親交を深めることができた。湯舟坂2号墳発掘当時の思い出や地元の文化遺産にかけける思い、中には近所で土器を拾ったというエピソードを語ってくれた方もいて、こうした地域との交流なしには得ることができない大きな収穫もあった。午後は実際に発掘現場の古墳現地を案内し、現状での調査成果を説明した。須田区での発掘は湯舟坂2号墳以来約40年ぶりということもあって、参加者は地元のなじみある古墳での発掘に興味を示されていた。(吉永)

(2) 高龍小学校との連携プログラム

昨年度に実施した「つなプロ」をおおよそ踏襲する形で、発掘調査期間中に高龍小学校5年生26名を対象に発掘調査の見学・体験ツアーを実施した。以下、今年度の高龍小学校との連携プログラムについて紹介する。



写真6 地元向け説明会(須田公民館)の様子



写真7 地元向け説明会(古墳現地)の様子



写真8 発掘体験の様子（古墳現地）

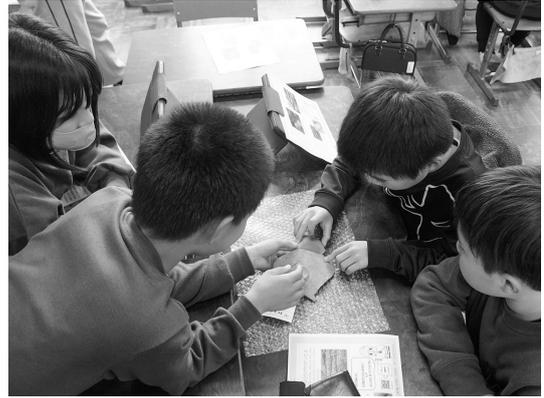


写真9 事後授業の様子（高龍小学校）

9月21日に学生が高龍小学校に出向き、見学・体験ツアーに向けての予備知識を教える事前授業をおこなった。ワークシートの活用やグッズのプレゼントにより興味を湧かせつつ、見学・体験ツアーに先だって親睦を深めた。

9月25日に須田平野古墳、湯舟坂2号墳、湯舟坂古代の丘公園の見学・体験ツアーを実施した（写真8）。その中で古墳や発掘調査に関するクイズを出題し、調査で使用する機材に触れる機会も設けた。また、石室内のみならず発掘現場の見学もおこない、さらには実際にトレンチ内で簡単な作業を体験する時間をつくった。小学生が興味を持ち、かつ印象に残るように、クイズや発掘体験など工夫を凝らした参加型コンテンツの分量を多くした。地元住民の方々が設置・維持している古代の丘公園などを通して、地域の文化遺産だけでなく文化遺産を守る人々の姿勢や気持ちを知ることによって本見学・体験ツアーのねらいを定めた。その点で発掘調査中の学生自身の姿を見せることができたのは利点であった。

12月6日には事後授業として学生が高龍小学校に出向いて事後授業をおこなった。事後授業では須田平野古墳発掘調査の成果をわかりやすくまとめたパンフレットを配布し、発掘調査で実際に出土した須恵器を小学生が観察する時間を設けた。小学生は須恵器の破片に興味津々であり（写真9）、予想を上回る観察結果を披露してくれた。発掘調査の成果を生かしながら、小学生が古墳で得た学びを、授業を通してより深めることができた。

一連の連携プログラムを通して、単なる文化遺産の魅力発信だけでなく、多くの人々の想いによって文化遺産が受け継がれていることを小学生に伝えることができた。こうした若い世代への発信は文化遺産の地域資源化において重要なステップの1つであり、次年度以降も高龍小学校とのつながりを発展させていきたい。（石川達葵・越川輝）

5. プロジェクトグッズの制作

本プロジェクトでは、湯舟坂2号墳出土品の再調査などで得られたデータや知見を活用して、様々なグッズの制作をおこなってきた。昨年度に引き続き、今年度も学生が主体となってグッズを制作したので紹介する（写真10）。

オリジナルしおり 第3回 ACTR 成果報告会にあわせ、湯舟坂オリジナルしおりを3種制作した。1つ目は、環頭大刀をモチーフとし、栗山雅夫氏撮影の高精細写真と金字大氏（滋賀県立大学）作成の実測図を表裏に組み合わせたデザインである。2つ目は、奥壁付近で出土し、



写真 10 プロジェクトグッズ集合
(栗山雅夫氏撮影)

最初の数回の埋葬に伴う須恵器を表に、羨道付近で出土し、追葬時に副葬された須恵器を裏に配置したデザインである。3つ目は、デフォルメイラスト化した遺物を配置したデザインである。湯舟坂2号墳から出土した豊富な遺物を周知するため、須恵器や装飾大刀、銅鏡などをピックアップした。

また、単にしおりとして活用してもらうだけでなく、解説シートを読むことで、しおりから湯舟坂2号墳をより理解してもらうことを意図して「湯舟坂2号墳オリジナルしおり解説シート」を別添した。これらは、第3回 ACTR 成果報告会でアンケート回答の返礼として配布した。

ポロシャツ 昨年度に学生自ら手がけたロイヤルブルーのポロシャツに、バーガンディとミントグリーンの2色を新たに加えて制作した。プロジェクト関係者のみならず、地域住民にも着用する方が増えており、共通のポロシャツを着ることで地元・大学・市の一体感が醸成されてきたように思う。

オリジナル野帳 須田平野古墳の発掘調査に併せて制作した。表紙には湯舟坂プロジェクトのロゴマークを箔押しし、見返しには久美浜町内の遺跡マップや古墳探検のポイントなどを記したシールを貼っている。随所に書き込む欄を設けており、小学生たちが自らの足で遺跡を探索し、野帳を活用していくことで自分だけの野帳に進化していく内容となっている。これらの野帳は連携プログラムの際に高龍小学校5、6年生に配布し、湯舟坂2号墳と須田平野古墳の見学の際に活用してもらった。(山内愛弓)

6. おわりに

本プロジェクトがスタートして4年、当研究室もメンバーは少しずつ変わりながらも、文化遺産への想いや、活動のノウハウなどを引き継ぎつつ、毎年古墳の地域資源化に励んできた。この4年で、学生だけでなく本プロジェクトに関わる多くの人々が須田の地を訪れるようになり、湯舟坂2号墳を核とした輪も、気づけば広く大きなものになりつつある。地域の方々をはじめとした、人と文化遺産のつながりに感謝しつつ、大学で考古学を学ぶ私たち学生が、地域の中でどのような役割を果たせるのか、常に問い続けなければならない。(吉永)

参考文献

- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023a 「古墳を地域資源化する(3)―湯舟坂2号墳プロジェクトの2022年―」『京都府立大学文学歴史学科 フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023b 「京丹後市須田平野古墳の調査(1)」『京都府立大学文学歴史学科 フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 吉永健人 2023 「湯舟坂プロジェクトとつなぐ一世代を超えた文化遺産活用―」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ―湯舟坂2号墳の被葬者像を探る― 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

編集後記

フィールド集報の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの考古・建築・地理・文化情報の合同実習メニューとして学生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっている。

今年度は、3年ぶりに多様な場所・フィールドで調査をおこなうことができた。調査時だけでなくその後の作業においても多くの方々からご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。

海外の調査も徐々にではあるが再開されるようになった。来年度はまた違うところに行きたいと思う今日この頃である。(き)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第10号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
